

# 1. 「柔道」の名称の起こりについて

筑波大学 藤堂 良明  
講道館 村田 直樹

## 1. A study on the origin of the name 'Judo'.

Yoshiaki Todo (Tsukuba University)  
Naoki Murata (Kodokan Judo Institute)

### Abstract

Research was conducted to trace the name "judo" back to its origins in the jujutsu period. The results were as follows:

1. The first use of the name judo was by Seijun Inoue IV, who applied it to his Jujutsu of Jikishin-ryu. Students of Jikishin-ryu Judo were not only expected to master its ninety-seven techniques, but to also develop into generous and gentle-mannered individuals.

2. Kuninori Suzuki V, the Master of Kito-ryu Jujutsu, changed the name of Kito-kumiuchi to Kito-ryu Judo in 1714. The purpose of Kito-ryu Judo training is to tap the vital energy of the universe, fusing the universe and the student into one, thus allowing students to lead their lives with sincerity. Twenty-one techniques in the kata of Kito-ryu Judo are meant for hand-to-hand fighting, with both combatants being completely clad in armor. Latent in these techniques is the principle of kuzushi, which is the key to the throwing techniques of modern Judo.

3. Jigoro Kano studied the judo of Jikishin-ryu and kito-ryu, and incorporated some of their concepts into his original system, which he named Kodokan Judo.

### I はじめに

一般に「柔道」というと、明治15年(1882)に嘉納治五郎が創始した講道館柔道を思い浮かべる。国際柔道連盟規約第一条「定義」にも「国際柔道連盟は嘉納治五郎により創始されたものを柔道と認める<sup>1)</sup>」と記され、世界中で行われている柔道は講道館柔道であると言える。しかしこの「柔道」という名称は、嘉納治五郎が初めて使用した言葉であったのだろうか。嘉納は生前、講道館を創設するにあたり「私が普通行われている柔術という言葉を用いなくて、何で高尚な一二の流儀で用いていた所の柔道という名称を付けたかについて説明いたしましょう<sup>2)</sup>」と記し、近

世の柔術流派の中に二つ程柔道という名称を使用していた、と説いている。こうした経緯から、本論文では「柔道」という名称を用いた柔術流派について明らかにし、「柔道」の名称の起こりについて考察したい。

そこでまず最初に『武芸流派大事典』において「松江藩に直信流柔道あり。柔道の名称はこの流が最初である<sup>3)</sup>」と記されているので、直信流についていつ頃、誰が柔道の名称を付け、如何なる意味があったのかについて考察してみる。次いで『柔道史攷』においても「起倒流柔術鑑組討云々として、柔術と呼びたるものもあるけれど、伝書の中には明らかに『起倒流柔道體の巻』と書きたるものあり<sup>4)</sup>」と記されているように、起倒流にも柔道の名称を使用しているものがあつたと説かれている。こうした点からも、起倒流ではいつ頃、誰によって柔道と呼ばれ、この流派の「柔道」の意味が如何なるものであつたのかについて考察する。なお研究方法としては、近世に書かれた両流派の柔術伝書を見ることにより、「柔道」の名称の起源及びその技術と思想を明らかにしようとするものである。

## II 直信流柔道の起こりについて

わが国の柔術は今村によれば167流派が存在し<sup>5)</sup>、柔術の源流とされる竹内流腰之廻や制剛流和と称される一部の流派を除いては、ほとんどの流派で柔術の名称が使われていた。こうした中、直信流は「柔道」の名称を使用した最初の柔術流派として挙げられ、これまで直信流柔道の創始については次のように言われてきた。たとえば島根地方の武道について書かれた『雲藩武道史』では「寺田勘右衛門満英は元和四年(1617)若狭で生れ、父の定安について貞心流和術の奥義を窮めたが、やがて武者修行を志して京都の叔父頼重より福野流の柔術を授かった。その後天下を周遊して、僧沢庵より禅を、林道春について儒学を学び、遂に一家を大成して、自己の流派を直信流柔道と名付けて出雲に帰り、禄二百石を賜り師役となった<sup>6)</sup>」と記され、寺田満英は貞心流和術と福野流柔術を学び自らの流派を直信流柔道と名付けた、と説かれていた。また『武芸流派大事典』においても「寺田満英は弓馬、刀槍および諸家の戦法を兼ね、僧沢庵について不動智の妙理を發明し、これを直信流柔道と称した<sup>7)</sup>」と記され、直信流柔道は満英が創ったとされていた。

しかし、今回新たに入手した『直信流柔序』(寛文十年、1670)を見てみると「父定安、柔能制剛術を福野氏に語る。福野氏感じ此の術を求む。福野氏牢浪家貧しく為に此の術をうり、或いは増し、或いは減らし新当和と号す。其の後定安は弟頼重に此術を講習して不足を補い不備を修む。予(満英)幼きよりおじ頼重に従い、听夕覃研して此心に通ず。別に直心柔と號す<sup>8)</sup>」と記され、寺田満英は父定安とおじ頼重より学んだ和術を工夫して、自分の編み出した流派を直心流柔と呼んでいたことが説かれている。これによって、これまで直信流柔道を創始したとされた寺田満英は、まだ柔道とは呼んでおらず、また流名も直信流ではなく直心流であったことが窺えた。これを裏付けるように、伝書も『直心流柔術応変<sup>9)</sup>』となっていた。

### 直心流柔術応変

- |      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| 一、風燕 | 一、玉簾 | 一、沈乱 | 一、空曲 |
| 一、轉輪 | 一、追浪 | 一、車形 | 一、揚柳 |
| 一、任発 | 一、落葉 |      |      |

当流の柔術雖非其人 不伝以其志異他。目錄の旨  
伝授不可有他見他言者也

寺田平左衛門尉定安 寺田八左衛門尉頼重



この「赦状」によると、流名が直心流柔術から新たに柔道直信へと変わっており、柔道直信の師範も井上正順となっている。また宝暦三年（1753）に記された切紙も、次のようになっている。

直信柔道兵術

一、拾九傳  
 一、健席傳  
 右二ヶ条令相傳、是を以て流儀奥蔵之旨、開悟有る可き、切紙件の如し。  
 宝暦三 酉天 三月吉日  
 井上治大夫正順

ここでも流名が直信柔道となっており、師は同じく井上正順だった。この井上正順という人物は『直信流柔道続々伝記』によると「幼きより当流を多年錬磨し江府に赴き諸流の術を参考し、ことごとく事理に通達し其精妙を得て、満英氏以後古今の達人也。近来当流の道法惑乱したるを改称して『中央書』などの如く書を著し、其功行浅からずを以て正順師を当流の中興の祖とも申す也<sup>12)</sup>」と記され、寺田満英以後の達人であり直心流の道法が乱れてきたのを再編成し直した、と説かれている。更に続けて「享保九年四月、父正永師の家を相続し、以て柔道の教師を蒙り、夫より師役相勤め、終に禄二百十石に至り、右師範役勤中五十六年、安永九年（1780）三月出雲に於いて没す。行年八十六歳也<sup>13)</sup>」と記され、正順は享保九年に第三代正永より家督を相続した、と説かれている。また亡くなった1780年から柔道の師範在任期間五十六年を引くと、やはり1724年となる。こうしたことから、井上正永まで続いた直心流柔術は、享保九年（1724）に四代井上正順によって、直信流柔道の流名に変わったといえるだろう。

### III 直信流柔道の技術及び思想

直信流柔道の技は『柔道業術大目録<sup>14)</sup>』によると、次のようなものであった。

○表業三十五本

●発端所作

止水：受が右腰で投げようとするのを、取は受の体を後退させてから後ろ腰で投げる。

巡勢：受が右腰で投げようとするのを、取は受のあごを制して横捨身技で投げる。

力避：受が両手で取の帯をとろうとするのを、取は手首をとって、左側へ引き落とす。

逆任：受が両手で取の帯をとろうとするのを、取は体を引きながら、横捨身技で投げる。

運抱：受が後方より抱きかかえてくるのを、取は後頭部で当て身を打ち、すかさず受の右足首をとって後方へ投げ、右足で受の右横腹へ当て身を打つ。

権奪：受が取の右手首をとると、取は後ろへそらして、後ろ腰で投げる。

応疾：受が内股にいくと、取は足をあげながら防御して、横捨身技で投げる。

立従：取は無二無三に受の両襟をよって後方へ押しながら背負投で投げる。

走臨：受は取の前帯をとると、取は右手であごを打ち、右にふって浮落しで投げる。

走更：受が前帯をとるのを、取は右にひねりながら倒し、脇指で制す。

- ・先所作（天投、冠投、投、延投、地投）
- ・小具足（縫割、附潜、抜押、重返、披落、留指、引分、ひじ廻、違掛、腕巻）
- ・居相（中剣、横巻、上剣、立薙、下剣）
- ・太刀相（白色刀、青色刀、黄色刀、赤色刀、黒色刀）

## ○隘業三十本

- ・格業、楯業、迅転、試剣、劍撲

## ○裏業三十二本

- ・乱所作（一投、二投、三投、四投、五投、一廻り、二廻り、三廻り、四廻り、五廻り）
- ・変趣所作（片手採、両手採、片胸採、両胸採、片裙採、前腰採、後腰採）
- ・小乱（寄流、左返、左転、操戻、反搦）
- ・居相（羽剣、微剣、角剣、商剣、宮剣）
- ・太刀相（逸刀、変刀、切刀、切身刀、老輪刀）

以上のように、表業三十五本、隘業三十本、裏業三十二本の合計九十七本あった。中でも発端所作十本は、横に捨てる技や背負って投げる投技に秀れたものがあつた。とりわけ直信流柔道の背負って投げる技は、他流（たとえば起倒流の雪折）が後方から抱きつかれた際に施すものであつたのに対し、双方向かいあつた状態から両襟をもって施すものであつた。また居相技が新たに加わり、軽装時に不意に相手に攻撃されても対処できる技が多くなってきたのも特徴といえる。四代井上正順は、その著『直信流柔道中央書』の中で「組討、刀剣を二行に立て勉るは当流也。組討・刀剣は鳥の両翼の如くすべし。能く兼全して其の場其の場に宜く之を仕なすべし<sup>15)</sup>」と記し、直信流柔道では鳥の両翼の如く組討、刀剣を兼練させるようにした、と説かれていた。

一方、四代井上正順は何故柔術という字を排して「柔道」の名称を付けたのであろうか。井上正順が直信流柔道に流名を変えた享保九年頃は、＜享保の改革＞を断行した徳川吉宗（在任期間1716～1744）が現われたとはいうものの、まだまだ元禄文化（1688～1704）のなごりもあり世情は遊興に流れていた。当時の武芸のありさまは、『鈴録』によると「総じて武芸は、手足を習はして走廻の達者になるべき為なるに、わざを卑しきに事に云て、理を談ずる輩、皆太平の戲玩に似たり。今時の武士は懦弱になりたれば、せめては武芸のわざの丈夫にし、手足の働きの強くなるべき流を吟味して習はずべき事なり<sup>16)</sup>」と記され、武士は懦弱になり武芸も衰退の方向に向かつていた、と説かれている。こうした折、直心流でも当然土風の立て直しの気運が起こつてきたのであろう。享保十四年に井上正順の門人、堀江は「柔道の至理乱れて、道德日を追って衰う。吾が師、これを歎き以て柔の道改補する也<sup>17)</sup>」と記し、師匠正順は、直心流の道德の面が衰えてきたのを歎いて改めて柔の道を説いた、としている。それでは一体、柔の道とは具体的には如何なる内容であつたのだろうか。彼の著した『直信流柔道中央書』及び弟子の記した伝書から拾い出してみた。

名称	武芸伝書中の言葉	名辞の意味する内容
柔の道	天下に充滿してよく柔、万物を育す。故に柔は至大の道也。草木鳥獸にいたるまで尽く生ずる所柔の道也。 <sup>18)</sup>	柔そのものが万物を育てる道（徳）である。
柔の道	天下の柔は水に過ぎたるはなし。水は至て柔なりといえども、裂火を消し、堤も壊ることあり。柔能制剛、弱能制強する。是をもって柔の道尊ばずんば有べからず。 <sup>19)</sup>	柔（水）そのものが偉大な力を持つ道である。
柔道	天地のあいだに人民を生ずるに随つて性というもの備わる。其性の中に寛柔温和の徳自然と所有す。是に随うを柔道という。 <sup>20)</sup>	寛柔温和の徳に随つて万般を処していくこと。

柔道	全く組に偏せず、劍に偏せざる所、業理相備わって自在也。中央は至極のなかば道理にあたり、亦此の中央を柔道という。 <sup>21)</sup>	組討も刀劍も共にでき、自在に対処できること。
道	陰中の陽、陽中の陰、一陰一陽を道と名づくとし、剛柔一和の柔、是を守るを道とす。 <sup>22)</sup>	剛を含んだ柔を守っていくこと。

これによると、直信流柔道の柔道の意味を表す言葉には「柔の道」「柔道」「道」という三つがあった。思想的に見ると、直信流柔道では柔道が根本なのであるが、柔道の「柔」には万物をはぐくみ育てる道のような働きがあるとして重さを置いた。そしてこの自然界の根本である柔は、人間の生れながらの心、つまり性の中にも自然に備わっており、これを「寛柔温和の徳」といって尊んだ。一方技術的には、刀劍と組討の技を修得することを柔道と呼び、その過程で「剛柔一和の柔」の精神を学べと説かれた。結局直信流柔道では、技術を修得する過程で剛柔一和の柔を体得し、やがて寛大で温和な徳を発揮して世を処していけるような人物を作ること为目标としたのである。

#### IV 起倒流柔道の起り

「はじめに」で記したように、起倒流にも柔道と呼ばれるものがあつたようなので、まず起倒流の系図をもとに見ていくことにする。

起倒流は、まず茨木専齋が起倒流乱を編み出し、その後寺田満英が起倒流組討の名で広めていった。この寺田満英は身長151センチメートルほどの小柄ではあつたが「僧沢庵について不動体不動智の妙理を発見し、その後林道春に儒学を学びついに一家をなした。そして出雲に返り禄二百石を賜り師役となつた<sup>23)</sup>」とされ、また直心流の祖でもあつた。そして満英から三代後の井上正順は享保九年に、歴史上初めて「柔道」と称した直信流柔道を創始している。言ってみれば、起倒流も直信流も元をたどれば寺田満英より出ており、親戚関係にあつたことからして、起倒流組討系統もやがては柔道と改称する運命にあつたと考えられる。

ところで起倒流組討では、寺田満英の門に吉村扶寿(2代)が出て傑出し、次いで滝野遊軒(4代)は起倒流を江戸に大いに広めた。この滝野の門下に鈴木清兵衛邦教(5代)がおり、邦教は寛保元年(1741)二十才の時に相続して、御天守番になっている。そして、この鈴木邦教の弟子の中に、白河藩主、後の

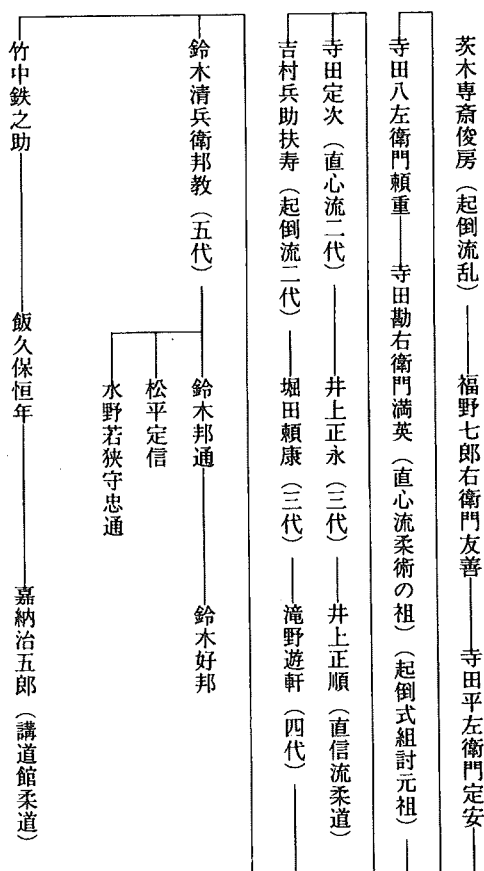


図 2 起倒流の系図

Fig. 1 Genealogy of Kitoryu-Jujutsu

寛政の改革を主導した老中主座の松平定信がおり、定信は天明二年（1782）に25歳で入門した。定信は、この年に口中腫瘍に悩まされ、入門の直前まで体調の不調が続き柔術の効果については疑問視していた。そこで「天明二年八月頃にか有けんにとよりて起倒流の柔道を学ぶ。その前より水野少甫、奥平らみな予をすすめけれども、鈴木清兵衛邦教の術は妙術にして、人君学べば上達するなどあられる妙を聞きしかば今年ようやく学ぶ。学べる日よりその術の正しくして、聖賢の道にも正当することを悟る<sup>24)</sup>」と記され、松平定信は体調を立て直すために起倒流を学んだ、と説かれている。またこの記述によると、松平定信は鈴木邦教より柔術ではなく起倒流柔道を学んだことが読み取れる。ところで何故、鈴木邦教は柔術ではなく柔道と呼んだのであろうか。

松平定信の書いた『修行録』には「鈴木邦教というものを柔道ということ唱えて、諸侯にもあまた弟子となりける。～中略～ 剣術十何流かを学びきわめて、その家にいささか書ける神武の道を人に教えんとはかりて、その神武の道、一子相伝とあるを人にほどこさんもいかがなりとて、明和九年日光御社参りの御供して祈誓してける<sup>25)</sup>」と記され、鈴木邦教は鈴木家に昔から伝わる「神武の道」を起倒流に取り入れることによって、起倒流柔道を開いたというのである。このように見てくると、寺田満英（起倒流組討元祖、直心流柔術の祖）は、禅や儒教を学び、術だけでなく柔の道の大切さを藩士に指導していた。そして、寺田満英の4代後の鈴木清兵衛邦教により、代々鈴木家に伝わる「神武の道」の教えを取り入れて、新たに起倒流柔道に改称したのである。時は鈴木清兵衛邦教が家督を相続した寛保元年（1741）のことと考えられる。

## V 起倒流柔道の技術と思想

前章で見たように、起倒流柔道の名称の背景には鈴木家に代々伝わる「神武の道」があったといえる。この「神武の道」とは如何なるものであったのだろうか。起倒流柔道を鈴木邦教のもとで修行した松平定信は『兵法大意口伝抄』の中で、神武の道について次のように記している。まず「人は天地なり。それ天地もと一物なり。その気のすめるはのぼりて天となり、濁れるものは下りて地となる。その気天地に満ちて間断なし<sup>26)</sup>」と記し、我々の住んでいる天地は気により成り立っていると説いている。そしてこの気は、人の呼吸にしたがって全身を巡り「人の病で死するは呼のみにして吸なく、天地に気満つるにあたる時はおのずから人の体も穴よりして、みなその気のみたしむ。ゆえに死することなし<sup>27)</sup>」と記され、人間は天地の気を吸いこみ気が体中を充満している時は多いなる活動ができる、と説かれている。それでは、如何にして天地の気をわが体中に周旋せしめるかという「わが肩を平らにして肺金を安んずる時は、心火下につく。これによって人の病苦を察するに、五臓全く備わり天地の気体中に充満するときは、則神人といふ<sup>28)</sup>」と記され、肩をいからせずに平らにすることにより天地の気を充満できる、と説かれている。そして、胸中ものなく五臓が整っている時こそ、天地と我とが一つとなり神人合一の境地が開けてくる、と説かれているのである。又この書には、神人合一の境地として誠の大切さもあげている。「天地は誠の外に物なし。夫婦交感のとき一豪の他念なくその誠一つに合する時は即子を生ず。故に人はその誠を受けて生ず。されば組討陣また他に論なきこと知るべし。両誠一つに混じれば人と我とを分かつ。ここに至っては物なし、しかも勝ことなし、故に人まけることなし。ただ誠あるのみ<sup>29)</sup>」と記され、誠を尽くすことにより我に敵なし人に敵なしの境地になれる、とも説かれている。こうしてみると「神武の道」とは、天地を貫く気を体中に充満させ、何の邪念もなく誠の心を貫くことにより、神人合一の境地に至る道であったと言える。鈴木邦教が柔術ではなく柔道として世に発表した背景には、こうした「神武の道」に基づく思想があったと言える。一方、起倒流の技術を見ていくと次のようになる。起倒流を編み出した茨木専齊は、体、車、請、左

右、前後を基本に、行連、行違、行当、身碎、谷の五種を奥、さらに外物として取合、引落、外詰、責、嵐、風車、楯合、技身、生捕縄、坂、橋、水中、馬上の15所作に至るように構成した。次いで、起倒流組討二代吉村扶寿が、「表の形」として体、夢中、力避、水車、水流、曳落、虚倒、打碎、谷落、車倒、鍛返、夕立、滝落の14本、「裏の形」として身碎、車返、水入、柳雪、坂落、雪折、岩波の7本を拵えた。この21本の「形」は鑑組討の形であり「当はいかほどの大力にても手一つの力なり。投げは敵の五体の重みを以てするゆえ甚だ強し<sup>30)</sup>」と記され、当身技よりも投技に重きを置いていた。そして、この表14本の形については「すべて十四形は本を務の意にして、我本体を堅固になし手足屈伸進退を練せしむる形也<sup>31)</sup>」と記され、本体という押されても引かれても動じない姿勢を作ることにあつた。一方裏の七つの形は、不取段とも呼ばれ「不斷修行に気の段を取らぬという義也。勝負の業にも自然と叶う事也<sup>32)</sup>」とされ、各技を区切ることなく連続して行うようにと説かれている。

この表14本の形を業の原理から分類してみると、次のようになる。

体、夢中	体さばきによる崩しを教える。
力避	体さばきで組まずに倒すことを教える。
水車、水流、曳落	関節技（前腕部を掴む）から投技への連絡を教える。
谷落、車倒	後方攻撃に体する捨身技を教える。
鍛取、鍛返	前腕と首を制してからの投げを教える。

裏の7本は技の原理から分類すると次のようになる。

身碎	前腕を制しての投げを教える。
車返、水入	突いてくる上腕を制しての投げを教える。
柳雪、岩波	当身技から投技への連絡を教える。
坂落	前腕を掴んでの投げを教える。
雪折	後方攻撃に対する背負って投げる仕方を教える。

このように「起倒流の形」は、横捨身系統の技と背負って投げる技を除いては、具体的に手、足、腰を使った投技は示されていない。しかし21本の「形」の全体に見られるのは、自然体の構えで相手を崩して投げる、という投技の原理を教えてくれる。また当身技や関節技も相手を殺傷するのではなく、投技への連絡として用いられている点に特徴があつた。嘉納は、明治14年（22歳）に起倒流の飯久保恒年に入門し、二年後に免許皆伝を受けた。嘉納は「起倒流の形」が技術的にも理論的にも優れているとして、そのまま講道館「古式の形」として残しているのである。

## VI まとめ

①わが国で最初に「柔道」という名称を使った柔術に、松江藩に伝わる直信流柔道があつた。直信流では四代目井上正順が、享保九年（1724）にそれまでの柔術の名称を柔道に代えたと考えられる。というのはこの年に、井上正順は井上正永（3代）より家督を相続しており、初めて伝書に直信柔道の名が記されているからである。

②直信流柔道の技は97本あり、組討と刀剣の技を備えた総合武術であつた。また思想的には技



術を習得するだけでなく、その過程で剛を含んだ柔の大切さを知り、やがては寛大で柔和な心を持って世を廻して行けるような人物を作ることが目的とした。井上正順は、このように術を超えた道の意義をはっきりと打ち出し、元禄期以降一時廃れていた士風を刷新しようと試みたのである。

③起倒流では、鈴木清兵衛邦教（5代）が鈴木家に代々伝わる「神武の道」を取り入れ、寛保元年（1741）に起倒流組討を起倒流柔道の名称に変えた。この「神武の道」とは、天地を構成する気を体内に充満させ天地の働きと一体になり、しかも誠の心を貫くといった神人合一の境地を体得することであった。ここに、起倒流柔道の道の意義があった。また「起倒流の形」は表14本、裏7本の鎧組討の技であったが、自然体の構えで相手を崩して投げるといった投技の原理を教えている。

④嘉納は、こうした直信流柔道と起倒流柔道の存在をもとに、明治15年、術よりも道の字の方が高尚であるとして、講道館柔道の名称に統一した。

#### 参考文献

- 1) INTERNATIONAL JUDO FEDERATION HANDBOOK OF THE IJF, 31頁, 1987.
- 2) 嘉納治五郎：柔道一斑並に其の教育上の価値, (編) 渡辺一郎「史料 明治武道史」新人物往来社, 86頁, 1889.
- 3) 綿谷雪：武芸流派大事典, 東京コピー出版部, 334頁, 1978.
- 4) 桜庭武：柔道史攷, 第一書房, 93頁, 1935.
- 5) 今村嘉雄：十九世紀における日本体育の研究, 不昧堂, 344頁, 1972.
- 6) 福田明正：雲藩武道史, 今井書店, 24頁, 1965.
- 7) 綿谷雪：武芸流派大事典, 東京コピー出版部, 219頁, 1978.
- 8) 寺田満英他：直心流柔序, 寺田家所蔵, 寛文10, 1670.
- 9) 井上正永他：直心流柔術応変, 井上家所蔵, 享保6, 1721.
- 10) 渡辺一郎補訂：柔道直信流系図, 井上家旧蔵, 享保9, 1724.
- 11) 井上正順：赦状, 堀江家所蔵, 享保9, 1724.
- 12) 直信流柔道統々伝記, 旧武専, 写本, 1882.
- 13) 直信流柔道統々伝記, 旧武専, 写本, 1882.
- 14) 堤六蔵：柔道業術大目録, 渡辺一郎氏蔵, 安政3, 1856.
- 15) 井上正順：直信流柔道中央書, 旧武専, 写本, 享保14, 1729.
- 16) 渡辺一郎編：武道の名著, 東京コピー出版部, 301頁, 1979.
- 17) 堀江氏意展：直信流柔道中央書序, 旧武専, 写本, 享保14, 1729.
- 18) 井上正順：柔道中央書、柔大, 旧武専謄写本, 享保14, 1729.
- 19) 井上正順：柔道中央書、柔大, 旧武専謄写本, 享保14, 1729.
- 20) 井上正順：柔道中央書、柔大, 旧武専謄写本, 享保14, 1729.
- 21) 井上正順：柔道中央書、序也, 旧武専謄写本, 享保14, 1729.
- 22) 井上正順：柔道中央書、柔大, 旧武専謄写本, 享保14, 1729.
- 23) 福田明正：雲藩武道史, 今井書店, 24頁, 1965.
- 24) 松平定信, 宇下人信：修行録, 岩波書店, 53頁, 1942.
- 25) 同上, 182頁
- 26) 板沢武雄：天壤無窮史観, 日光書院, 178頁, 1943.

- 27) 同上, 182頁
- 28) 同上, 184頁
- 29) 同上, 187頁
- 30) 入江康平: 柔道関係史料上巻, 筑波大学武道論研究室, 226頁, 1992.
- 31) 水野忠通: 柔道雨中間答 (1806), (編) 渡辺一郎, 武道の名著, 東京コピー出版部, 201頁, 1979.
- 32) 寺田正浄: 登集 (1729), (編) 渡辺一郎, 武道の名著, 東京コピー出版部, 181頁, 1979.